

蘇芳集

八十八夜

高橋 さえ子

遮断機のあがり八十八夜寒
回復かうりずん南風に髪吹かれ
まぼろしの汽笛が近し慰霊の日
鳥籠を置く牧水の夏野原
人ごゑに鯛釣草のゆれてゐる
薬湯のかくまで熱し芒種の夜
急流の夕風匂ふほたる草

蝸牛

青山

丈

葉桜になつたばかりの手足かな
昼顔はりハビリへ行く道の花
十葉の一つ一つをあるだけ見る
十葉の中に十葉咲いてをり
家を出るときから今日は心太
出たままの浮葉の向きでありしかな
蝸牛見た目を今日のことにする



日と風に

小島 みつ如

夕 鐘

真保 喜代子

日と風に幾千のばら喜氣と照り
注目の手の平大の黄薔薇かな
薔薇いろいろ丹沢嶺を借景に
ばら揺るる影胸元に陶人形
苑も奥白きベンチに揚羽蝶
総身に薔薇の香しむる昼餉かな
令和元年薔薇に酔ひ人に酔ふ

積 奠

清水 裕子

葉 桜

富田 正吉

飛花落花こころの隙を突かれたる
桜しべ降る手荷物に身を傾げ
陽炎を見てゐるうちに眠くなる
何や彼やひとを頼りに藤の頃
多羅葉に祈りのことば積奠
啄木の忌や土塊に翳日向
黒猫のアネモネの鉢横切りたる

虚子の忌の白湯に鉄気のありにけり
惜春や白い巨船と海鳥と
まつさきに小さき金魚とむつむかな
さざなみが目の端にあり青き踏む
葉桜や向き合つてゐる椅子と椅子
踏台の上より返事緑さす
人中に人で居りたる更衣

靈山

長沼 三津夫

庭草

前田 陶代子

靈山の朝焼としてかがやける
靈山としてひとすぢの滝激し
原爆の日や朝よりの海鳴つて
船影の涼しさ汽笛上げにけり
鳥渡る誰にともなき遠汽笛
海鳴の間近に団地の灯の涼し
星つぶのきららに短夜の更けて

梅雨の猫

野路 斉子

子規庵

宮尾 直美

弱気なり梅雨の深さに躓いて
泰山木の花の大きな雨雫
つんのめるやうに駆け抜け梅雨の猫
人が居て繭咲き何か喰べ物屋
いそいそと連れ立ち雨のかたつむり
簾が一枚訪はるる人に訪ふ人に
幽霊坂と云ふ親しさの夏落葉

雨の日の銀座に春を惜しみけり
子規庵に糸瓜の苗の届くころ
梧桐の大きな影や父は亡し
緑さす山懐に能舞台
祝日の子どもらの声桜の実
母の日のひとり居に聞くオルゴール
渡し場のあとかたも無き螢かな